

## 大会実行委員長 おくださがこ

今年の記念講演を受けてくださった山内若菜さんの作品展を観てきました。想いの込められた絵画作品が直に伝える迫力をあらためて痛感せざるを得ませんでした。子どもたちの作り出したものも、表現は稚拙であってもそれぞれのおもいが込められています。それを読み取るちからをつけたい、と思ったことが、私が美術教育の研究会に参加してきた原点であり、現場を離れたいまもつながり続けている理由です。文学や音楽も、絵や造形作品も、受け止める人がいることで、表現することが楽しくなるし、意欲がかきたてられさらに深いものになっていきます。AI には、そういう表現をうけとめる力はありません。人間の心から生まれた色や形（音楽や言葉も）に込められた様々なおもいを受け止め、心を通わせあうことは、生身の人間にしかできない最も人間らしい営みだと思えます。

気温の乱高下、猛暑、豪雨、山火事など、環境破壊・気候危機が引き起こした災害や食糧危機の中で世界の戦争は止まず、地球も社会も不穏な日々ですが、どんな状況にいる子どもも若者も、健康で、豊かな感性をもって育ててほしい！それは、私たちの共通の願いです。新しい絵の会は、戦後一貫して、子どもたちに表現する楽しさとその力をはぐくみ、それを通して生きる喜びを伝えたいとさまざまな実践を生み出し、検討し、共に学んできました。

生きたい！心通わせあいたい！美しいものを感じとり、自分の手を使ってなにかをつくりだしたい、というのは私たち人間にとって共通のおもいであり楽しみなのではないでしょうか。デジタル教育が叫ばれ、子どもたちの身の回りにバーチャル世界が広がってくるなかですが、やはり五感をくぐらせ、手を使ってものをつくりだす体験なしに、新鮮な感動や表現の土台はつくれません。美術教育というのはもっとも人間的な大切な分野だと思うのです。

子どもたちとの様々ななかかわりの中から生まれた実践を通し、今年も学びあいたいと思います。学校や保育などの現場だけでなく、様々な場で子どもや若者とかかわって美術や表現活動に関心を持つ方々と学びあい、元気になる大事な二日間にしましょう。



## 2025年 新しい絵の会 横浜全国大会 基調提案に思うこと

### 新しい絵の会事務局長 三嶋真人

はじめに…温暖化のためか、6月は今までに異常に暑く、そのまま夏に変わり、日々の生活への影響も大きくなっています。地球規模の変化なのですが、有効な手だてを打っているのでしょうか。自国中心主義を掲げ、弱者への配慮もなく、戦火も絶えず、不安なニュースばかりが目につきます。このような情勢だからこそ、地に足を付けた、お互いを信頼しての共同（自由で民主的な）事業が必要なのでしょう。

昨年は久しぶりに東北での全国大会の開催でした。東北は戦前、北方性教育運動（生活つづり方を中心とする生活現実に根ざした表現活動）が展開されました。東北のサークルでは戦後すぐに、その歴史的な遺産を引き継ぎ「くらしの絵（生活画）」を中心にした実践を進めてきました。また、版画教育、宮沢賢治を生んだ土地柄なのでしょう、文学と絵画表現を結び付けた様々な作品が生み出されていて、その伝統を感じました。

今年に関東、横浜での開催となります。大会での基調となるテーマ・課題は次のような内容です。皆さんの実践と合わせ、検討を深めてほしいと思います。

- ①保育、学校現場と子どもたちの日々…
- ②表現教科としての図工・美術教育…
- ③今日的な課題としての「デジタル・AI教育」…



※実際の講演では、内容に変更・追加があることをご了承下さい。

## 「『いのちの絵から学ぶ』若い世代へつなぐために一最も小さい声 命の発露」 山内若菜

### 1. 「絵描きとしての体験」

私は就職氷河期世代の元社畜。さんざん働いて使い捨てにされる自分と、福島の殺処分される動物たちを重ねて描いたのが始りの絵描きです。

命とは何なのか、生きるってどういうことなんだろう、という疑問から絵描きという道を選びました。

### 2. 「みんなで作品をつくったこと」

2021年は、「おれたちの伝承館」で、7m×5mの巨大な天井画を、小高に集まったみんなと一緒に釣り上げることに成功しました。社会的な問題に対し、絵描きができることはある、きっと。そんな声が信じられた瞬間でした。私は真っ黒な絵を2011年から描き続けてきたのですが、長いプロセスを経て、この天井画にたどり着きました。

みんなで力を合わせて、天から降るように寝て見上げた時、みんなの絵になったと感じられ、生きていて、今までで一番幸せな瞬間でした。

今、「おれたちの伝承館」は、外国の方々にも足を運んでいただけるようになり、学生さんや団体の方も増え、注目されています。

天井画は、ダークツーリズムやホープツーリズムの枠ぐみの中で知られるようになり、本の表紙やメディアで紹介されています。

### 3. 「福島の絵が命の授業で役に立っている」

被ばくの牧場、死、自分自身への物みたくに扱う世界へか、吠えるように描いた絶望の絵が、今では命の授業で役に立っている。

それを手伝い、共にかなえてくれるのは、長時間労働の「学校」に勤める先生たちです。

### 4. 「他人の体験へ 絵を描くことを媒介に子どもも変わる」

絵をもとに、学校での「命の授業」がはじまり、絵は変化してきました。時に学生さんの意見で絵を変化させていき、相互成長をはかってきました。

告発だけじゃない。大騒ぎする力が絵にはある。そんなことを教えてもらいました。子どもたちから引き寄せてきた思いがあります。

私は中学校や市民講座などで、平和学習としてワークショップもしています。生きづらい世界を変えるには一人ひとりが変わることで、戦争を止めるには世論が変わること。今、子どもの個性が潰されていると感じています。その中で、悶々と頭の中で向き合うのではなく、絵と言う作品に吐き出せたから自分の命も続けられたという体験を私自身もしたので、それを子どもたちに伝えたいのです。絶望であっても目をそらさず、その表現を発表した途端、それは絶望ではなくなるという発見もしてきました。

### 5. 「希望のない所でも動物も母親もがんばっているんだ 生きてるんだ」

今、若い中学生の状況はどうでしょうか。

みんなと同じように生きなきゃというストレスにさらされ、こんな世界じゃ自分の居場所がないという思いを持っているように感じます。命の授業や講演会で、「リストカットをしている」と感想を書いている学生がクラスに3人いたこともあり、死にたいほどストレスがある子どもが多くいることを肌で実感しています。

コロナ以降、最近とくにその率が増えたと思っています。